様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ３０ 日現在

機関番号：３３９２４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ００８９２

研究課題名（和文）グローバル人材育成を目指した学習環境モデル構築のための総合的研究

研究課題名（英文）A comprehensive study for developing a learning environment model aimed at fostering global human resources

研究代表者
伊東　田恵（Ito, Tae）

豊田工業大学・工学部・特任准教授

研究者番号：４０３１９３７２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、グローバル人材育成のための方策として、体験型の学習環境モデルを研究した。体験型の学習環境として、セルフ・アクセス・センター（以下、SAC）での正課外英語活動の効果を多角的に検証した。1学期間のSACでのコミュニケーション活動の時間が平均より長いグループではスピーキングの流暢さが有意に上昇した。事例研究では、SACの活動を経験した学生、短期留学に参加した学生、両方に参加した学生の意識と行動の変容を、PAC分析で広範囲に探索した。その結果、海外経験がなくてもSACの英語活動で小さな成功体験を重ねれば、英語での会話や対人関係に自信が付き、異文化間の交流に積極的になれる可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
近年、大学が設置する体験型のSACや大型の体験型研修施設などで、留学以外でも英語がコミュニケーションのツールとして使用される環境に身を置くことが可能になった。短期留学による異文化体験は貴重であるが、高額な費用がかかる。大学が設置するSACは無料で卒業まで継続して利用できるため、価値が高い。本研究で、SACの英語活動に継続的に参加すると、英語への苦手意識が払拭されたり、異文化間のコミュニケーションの積極性が培われたりすることが示された。短期の語学留学を、より有意義なものとする点でも優れていることもわかり、本研究は日本人の英語力の向上に大きく貢献する。

研究成果の概要（英文）：This study investigated learning through communicative experiences in English. The effects of language activities at the Self Access Center (SAC) were examined from several perspectives. Both quantitative and qualitative research was conducted. The result of quantitative research indicated that a group of 18 students that spent more hours than the average students in communicative activities at the SAC, showed a significant increase in speaking fluency. In a separate case study with students, PAC analysis was used to extensively explore the transformations in attitudes and behaviors of these three who either 1) experienced SAC activities, 2) participated in short-term study abroad program, or 3) participated in both. The results of this case study suggested that students who experienced small successes in SAC's English activities, regardless of their overseas experience, have become more confident in speaking English and having interpersonal relationships.

研究分野：英語教育　第2言語習得　動機づけ

キーワード：セルフ・アクセス・センター　動機づけ　短期海外留学　正課外英語活動　PAC分析

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

急速な少子化による国内市場の縮小や内需の停滞を受けて、多くの日本企業は海外へ活路を求めている。海外にビジネスの拠点を持つ企業の 6 割近くが今後輸出拡大を図るとし（日本貿易振興機構，2014)、経済産業省の「通商白書 2019 概要」は、日本企業・産業が目指すべき方向性の一つとして海外展開拡大（成長市場への参入）を挙げ、他国に遅れをとることなく日本企業も輸出拡大・投資拡大を図っていくべきとしている。このような社会的要請に応えるため、多くの高等教育機関で英語教育の充実が図られている。正課外の英語の学習支援の一環として学生が自由に利用できる体験型の活動を提供する施設を設置する大学も増えてきているが、その効果検証は十分であるとは言えない。

２．研究の目的

本研究では、体験型の SAC とそこで行われる実践的な英語コミュニケーション活動の効果を研究し、英語力や動機づけ、異文化理解を促進する場としての SAC の有効性を検証する。英語活動への参加が発話の流暢さや TOEIC の得点に及ぼす影響の研究と、短期海外英語研修参加者と SAC での英語活動参加者の意識と行動の変容について事例研究を行い、体験型の学習環境が英語学習に及ぼす影響を包括的に研究し、その可能性を探求する。

３．研究の方法

1) SAC における英語活動時間が TOEIC の得点とスピーキングの流暢さに与える影響を調べるため、4 月と 7 月の 2 回、英語によるインタビューを行った。調査協力者 36 名が、教員と 1 対 1 で対話した。流暢さは、Yuan & Ellis (2003) の評価項目の Rate B（全体から繰り返し、修正、言い換えなどを除いた音節数から出した 1 分間あたりの延べ音節数）を産出量 （音節/分）とした。分析ソフトは SPSS ver.28 を使用した。言語能力への効果の量的分析に加え、事前・事後面談時の録画を観察し、質的分析を行った。同じ質問への回答部分のみを動画編集ソフトでつなぎ、非言語的表現を比較した。

2) 短期海外英語研修の参加者（52 名）の動機づけと異文化体験について、事前・事後の TOEIC テストと質問紙調査の結果から考察した。

3) SAC での活動が参加者に与える影響について、PAC 分析（内藤，2002）を用いて 3 つの事例を考察した。調査対象者はそれぞれ異なる英語体験を持つ学生 3 名である。

学生 A（男）：継続的な SAC 利用者で短期海外英語研修の参加経験者。提示刺激「iPlaza（対象学生の所属する大学の SAC の名称）での外国人や日本人との交流、イベントの企画の提案と実施にあなたが参加した経験が、外国人との関わり方にどのような変化を及ぼしたと感じますか。そのことがその後の留学先での体験にどのように影響したと感じますか。思い出してみてください。また、帰国してからの iPlaza への関わり方にどのような変化をもたらしたと感じますか。そしてその経験が将来の就職や働き方にどのような影響を及ぼすと感じますか」

学生 B（男）：SAC 利用経験はないが、短期海外英語研修には参加した。提示刺激「あなたが留学中に外国人との交流やプレゼンテーションについてより自信を持ったり、積極的に関われるようにするために、事前に学習や体験していればよかったと感じるのは語学力以外でどんなことが挙げられるでしょうか。将来、就職してから、外国人とのかかわりで必要となりそうなものについてイメージしてみて下さい」

学生 C（女）：継続的な SAC 利用者で短期英語研修の参加経験なし。提示刺激 「iPlaza での外国人や日本人との交流、イベントの企画の提案と実施にあなたが参加した経験が、外国人との関わり方にどのような変化を及ぼしたと感じますか。また、将来あなたが留学したとき、あるいは就職したとき、iPlaza での体験が外国や人々に対するかかわり方や働き方にどのような影響を及ぼすと感じますか」

調査協力者に連想刺激文を紙面と口頭で提示した。想起されたイメージはクラスター分析（ウォード法）で分析され、その後クラスターのイメージについて聴取した。分析ソフトは HALBOW7 を使用した。

４．研究成果

1) 英語活動時間が学生の英語力とスピーキングの流暢さに与える影響を調査した結果を表 1 に示す。活動時間が平均（13.2h）より長いグループに音節の産出量の増加が見られた（$t(18)=3.498$、$p=.001$、$d=.35$）が、下位群には見られなかった（$t(17)=.185$、$p=.432$、n.s.)。この結果から、活動時間が長い方が流暢さは高まったと言える。TOEIC の得点に関しては、上位群・下位群ともに 4 月と 7 月の得点の平均値に有意な差はなかった。活動時間と産出増加量の間には弱い相関（$r=.25$）が見られたが、課外活動時間と TOIEC の増加点の相関はなかった（$r=.09$）。

面談における非言語的表現の観察からは、事後面談では、表情から緊張感が薄れたり、視線を泳がせる頻度が少なくなったり、また、声に張りが出るなど、表情・視線・声にそれぞれ変化が確認された。

表1 課外活動時間、TOIEC、インタビュー（事前・事後）の結果

	活動時間(h)	事前				事後				TOEIC得点差(事後－事前)	産出増加量音節/分(事後－事前)
		TOEIC	産出時間(秒)	総語数	産出量(RateB)音節/分	TOEIC	産出時間(秒)	総語数	産出量(RateB)音節/分		
全体(n=36)	13.2	494	181	127	54	518	197	156	60	25	6
活動時間上位群(n=19)	21.8	514	180	136	59	532	202	174	67	18	8
活動時間下位群(n=18)	4.1	472	183	118	50	503	192	137	54	31	4

2) 2018年度に約1か月の短期海外英語研修に参加した学生（52名）を対象に、事前と事後にTOEICテストと質問紙調査を行った。事前調査では、英語力の向上と異文化体験への期待は大きく、中でもリスニング力とスピーキング力の向上への期待が高く（5件法で各平均4.5)、次いでTOIEC の得点向上（4.2）であった。事後調査で、実際にリスニング力とスピーキング力が向上したと感じている学生が多かったが、TOEIC 得点の向上はあまり実感できなかったようである。TOEIC の事後テストの結果でも、事前テストの平均点と有意な差はなかった（$t(51)=1.887$, $p=.065$, n.s.）異文化体験は概ね高評価で、動機づけについては事後に「英語をもっと勉強したい(4.1)」「また海外へ行ってみたい(4.5)」の項目が高かった。留学先での学習と異文化体験を通して海外への興味と今後の英語学習への意欲が向上したと思われる。

3) SACでの英語コミュニケーション活動が参加者の意識と行動の変容に与える影響について、それぞれ異なる英語体験を持つ3名を対象にPAC分析を用いて広範に探索した。学生Aから17項目が想起され、3つのクラスターが抽出された（図1)。学生Aは活動を通して英語でのコミュニケーションに自信を得て外国人との対話に積極的になっただけではなく、人との関わり方そのものが積極的で主体的になったと感じていた。また、SAC での体験が留学の効果を最大限に活かしたとも感じている。英語でのプレゼンテーションや意見交換、共同作業の経験により奏功した留学との相乗効果で、今後も世界との関わりの中で生きていきたいという思いも芽生えた。学生Aの意識が「内」から「外」へ、やがて「全体」へと広がりを見せ、グローバルな視点で人や物事との関係性や関わり方を考えるようになったことが分析を通して示唆された。

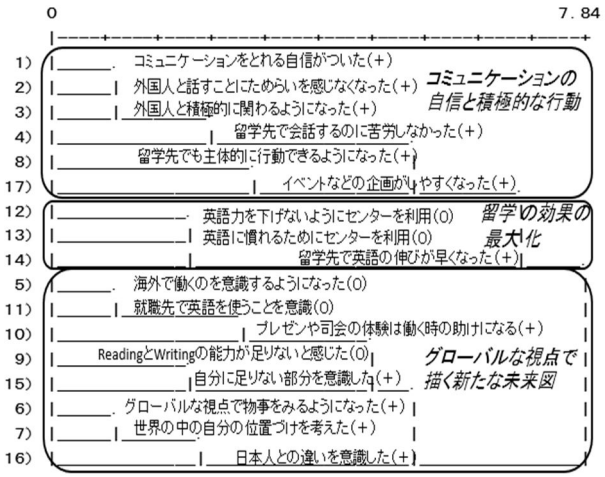

図1 学生Aのデンドログラム
1) 左の数値は重要順位
2) 項目の後ろの（　）内の符号は単独でのイメージ

学生Bから17項目が想起され、3つのクラスターが抽出された（図2)。学生Bは自分自身を典型的な日本人学生として捉え、積極的なコミュニケーションに踏み出せないもどかしさを感じながらも、現地での授業や交流から多くの学びを得て、自己表現や異文化・自文化理解という自身の課題を見出した。

学生Cからは21項目が想起され、3つのクラスターが抽出された（図 3)。学生Cは内向的な性格で英語にも自信が持てず、受け身の態度を自覚していた。海外留学経験はなかったが、SACのコミュニケーション活動に継続して参加し、小さな成功体験を積み重ねることで自信を付け、相手を楽しませるコミュニケーションを心掛けるまでに至った。さらには未知の世界も恐れないチャレンジ精神を獲得したと感じている。

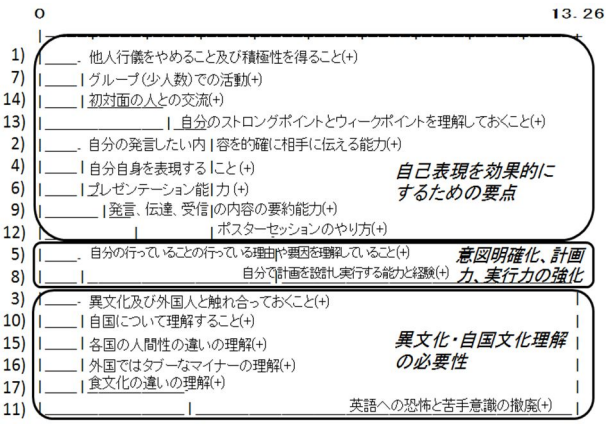

図2 学生Bのデンドログラム
1) 左の数値は重要順位
2) 項目の後ろの（　）内の符号は単独でのイメージ

学生Bが留学をより有意義にするために留学前に学べばよかったと感じたことは、SAC の英語活動への参加でほぼ補完できる。これらの3つの事例研究から、SAC の活動への参加が留学の

効果を最大化する可能性と、短期留学などでの異文化体験がなくとも、国内で異文化や外国人と触れ、英語への恐怖と苦手意識が克服でき、加えて英語のみならず人との関わり方やコミュニケーションのスタイルにも影響を及ぼす可能性が示唆された。

4) SAC を所有する大学の SAC 運営教員/スタッフへの調査では、9 校、11 名（教員 10 名、スタッフ 1 名）から回答を得た。SAC 施設は充実し、活動を担う教員と学生を含めたスタッフらは、コロナ禍で活動の形態を対面からオンラインに変えたり、利用時間を制限するなどの対応を取りながら、サービスを継続して提供していた。教員とスタッフは、新型コロナの終息後もオンラインは、一部継続するだろうと見ている。

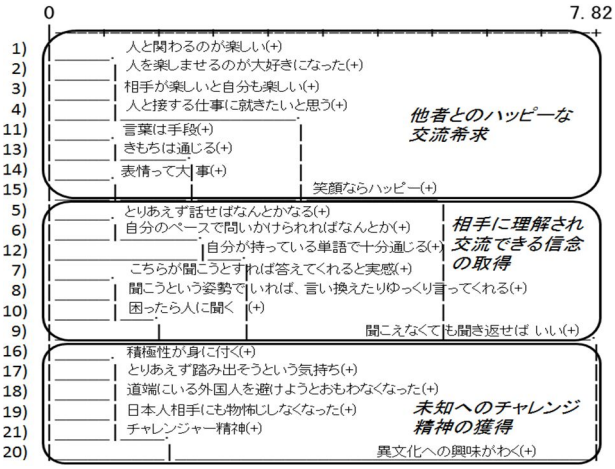

図 3 学生 C のデンドログラム
1) 左の数値は重要順位
2) 項目の後ろの（　）内の符号は単独でのイメージ

東京都教育委員会と企業が江東区に設立した体験型英語学習施設「TOKYO GLOBAL GATEWAY」は、言語使用時に想定される様々な場面を現実に近い形で体験ができる施設である。コロナ禍での海外留学代替研修プログラムも用意されていた。小学校から大学まで学校単位の利用ができ、質が良くバラエティに富む英語体験が可能な大規模な施設であった。

大学が設置する体験型の SAC や都が運営に関わる大型の体験型施設など、留学以外でも英語が使用される環境に身を置くことができるようになった。留学による異文化体験は、英語学習の動機づけや異文化理解につながるが、高額な費用がかかる。しかし、大学が設置する SAC は、無償で継続的に使用できるため、学生にとって価値が高い。また、SAC は語学学習支援全般の場であるため、英語以外の言語支援も期待できるし、コミュニケーションに限らず TOEIC テスト対策、語彙やポスターなどのコンテスト開催や、留学支援機能など、各大学のニーズに応じて様々な支援や発展が望める。

留学が実際の異文化体験であるのに対し、SAC や体験型の施設は、疑似的体験の場である。しかし、そうであってもコミュニケーションやプロジェクトを成し遂げたという喜びは本当で、それらは自信につながり、さらなる学習の意欲を引き出すであろう。SAC で積み重ねられる小さな成功体験は、留学に勝るとも劣らない貴重な体験である。

＜引用文献＞

経済産業省（2019）.「通商白書 2019 概要」.
内藤哲雄（2002）.『PAC 分析実施法入門[改訂版]』ナカニシヤ出版.
日本貿易振興機構（2014）.「2013 年度日本企業の海外事業展開に関するアンケート調査」.
Yuan, F., & Ellis, R. (2003). The effects of pre-task planning and on-line planning on fluency, complexity and accuracy in L2 monologic oral production. *Applied Linguistics*, 24, 1-27.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 伊東田恵・内藤哲雄	４．巻 大会発表代替論文集
２．論文標題 セルフ・アクセス・センターにおける経験が留学への適応と将来展望に及ぼす影響	５．発行年 2020年
３．雑誌名 応用心理学研究	６．最初と最後の頁 6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 伊東田恵・内藤哲雄	４．巻 -
２．論文標題 セルフ・アクセス・センターにおける英語コミュニケーション活動の効果	５．発行年 2021年
３．雑誌名 第14回 PAC 分析学会大会プログラム ・論文集	６．最初と最後の頁 17 18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 伊東田恵	４．巻 49
２．論文標題 短期海外英語研修プログラムへの参加者の期待と成果	５．発行年 2020年
３．雑誌名 中部地区英語教育学会紀要	６．最初と最後の頁 197　204
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 伊東田恵・西村厚子	４．巻 10
２．論文標題 「やさしい日本語」から「やさしい英語」へ－コミュニケーションのファースト・ステップとして－	５．発行年 2019年
３．雑誌名 I'NEXUS	６．最初と最後の頁 23　28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　0件／うち国際学会　7件）

１．発表者名 伊東田恵
２．発表標題 日本型セルフ・アクセス・センターの意義
３．学会等名 第8回異文化間情報連携学会（CINEX）年次大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 Tae Ito
２．発表標題 A Case Study: The Effects of Short-term English Study Abroad Programs for Engineering Students in Different Language Settings
３．学会等名 The 5th IAFOR International Conference on Education（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 伊東田恵
２．発表標題 短期海外英語研修に関する一考察
３．学会等名 第49回中部地区英語教育学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Tae Ito
２．発表標題 The Effects of a Self-access Center on Language Learning
３．学会等名 The 17th Annual Hawaii International Conference on Education（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 伊東田恵
２．発表標題 「やさしい日本語」が誘う内なる国際化
３．学会等名 異文化間情報ネクサス学会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 淺間正通・山下巌編著　伊東田恵(分担執筆)	４．発行年 2018年
２．出版社 遊行社	５．総ページ数 254
３．書名 『グローバル時代のコア・ベクトル』「もう一つのグローバルコミュニケーション」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

豊田工業大学研究者情報システム http://resach.toyota-ti.ac.jp/user/main.php

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	石川　有香 (Ishikawa Yuka) (40341226)	名古屋工業大学・工学（系）研究科（研究院）・教授 (13903)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	内藤　哲雄 (Naito Tetsuo) (20172249)	明治学院大学・国際平和研究所・研究員 (32683)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関